2017 年 7 月に開催された第 50 回日本ジョンソン協会大会シンポジウム「18 世紀イギリス文学研究の過去・現在・未来―日本からの発信をめざして」において、原田は司会・講師を務め、その際に講師として発表したものが本稿である。科研費研究（基盤 C（26370296））「近代英文学における日本の表象に関する実証的研究」の成果発表の一つである。

18 世紀英文学におけるリアリティとフィクション
―サルマナザール、デフォー、スウィフトの日本表象―

原田範行

それでは最後に、原田から、「18 世紀英文学におけるリアリティとフィクション―サルマナザール、デフォー、スウィフトの日本表象」と題して、20 分ほど、話題提供をさせていただきます。今日のシンポジウムには、副題として「日本からの発信をめざして」という文言を入れさせていただきました。ここにはもちろん、日本の 18 世紀英文学研究全般におけるスタンダードが、英米をはじめ、世界のそれに並びうるものであることを願って、というような趣旨があるわけですが、私の話題提供は、そうした願いとともに、18 世紀英文学研究の実質的な内容そのものにも、実は日本という舞台を想定することがあり得るのではないか、ということを示したいというものです。フロアの皆様からも、さまざまな角度からぜひ、いろいろなご意見をうかがえれば幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

さて、18 世紀の英文学において、日本はその微妙な表情をのぞかせることが少なくありません。分かっているようで分からない、分からないようでいて、しかし、ある種のリアリティを持っている――そんな存在として、です。例えば、H-1 をご覧下さい。1772 年 3 月 21 日のこと。久しぶりにサミュエル・ジョンソンの書斎を訪れたジェイムズ・ボズウェルは、冗談半分に、スコットランドはヘブリディーズ諸島の西端にある小さな島セント・キルダ島を購入したいと語ります。ところがジョンソンは、この話に本気になってしまう。「島民がもっと悪い奴らの手に落ちるのを防ぐためだ」というわけですが、意表を突かれたボズウェルが、「本気ですか？あなたが日本へ行くことをお勧めになるのなら、私はそうすべきだと思っているのですよ」と、やはり冗談半分に応じても時すでに遅し、ジョンソンはただ、「僕は本気だよ」とのみ答えたとされています。空想とリアリティが混在する島として、日本が、なんとセント・キルダと並んで登場するというわけです。

もう一つ、例をご紹介しましょう。ジョンソンとボズウェルのこの滑稽なやりとりがあった前年の 1771 年 6 月に刊行されたトバイアス・スモレットの『ハンフリー・クリンカー』の一節です。H-2 をご覧下さい。エディンバラから友人フィリップスに宛てたメルフォードによる書簡の一節で、メルフォードは伯父ブランブルの妹タビサのスコットランドに関する知識があまりに貧弱であることを、「スコットランドには海からしか行くことができない、

と彼女は考えていた」と伝えていますが、ここにまた日本が登場します。「ブリテン島の南半分の人々は、スコットランドのことを、日本と同じくらいほとんど知らないのだ。」スモレットが、この 2 年前に刊行した『アトムの物語と冒険の数々』で、日本を作品の舞台にするなど、一定の関心をこの極東の島に持っていた作家であることを勘案するとしても、突然、比較の対象として日本が登場するのはなんとも奇妙ではあります。しかし奇妙ではあるものの、少なくとも、そういう形で日本が当時の一般のイギリス人の意識の端に浮かび上がる存在であったことは、われわれもいちおう承知しておく必要はあるでしょう。18 世紀英文学において日本は、いったいなぜ、こうした虚実綯い交ぜの相貌を見せるのか。

マルコ・ポーロによる「黄金の国」伝説はともかく、イギリスにとって日本は、たしかに、17 世紀前半にはジェイムズ 1 世と徳川家康が親書を交わし、ウィリアム・アダムズが家康の外交顧問となって、東インド会社の商館が平戸に設けられるなどした貿易相手国でした。ところがその後、特に 1673 年のリターン号事件以降、外交も貿易も両国の関係はほぼ断絶します。ですから、人とモノの交流のない、ほとんど歴史的記憶のみによる日本表象が 18 世紀イギリスで跋扈していたということになります。もちろん、経済的にも軍事的にも、当時のイギリス政府が対日関係に無策であったというわけでは必ずしもありませんが、結局、この虚実綯い交ぜの日本理解は、イギリスの中国進出が本格化し、日本をめぐる国際情勢が大きく変化する 1830 年代まで続いたと言えましょう。18 世紀英文学研究において興味深いのは、こうした日本表象が、イギリスにおける小説という表現手法の誕生の時期と重なっていて、時に重要な意味を有していたのではないか、と思われる点にあります。18 世紀後半のスモレットやジョンソンの場合は既に触れた通りですが、特に 18 世紀初頭の 30 年間、すなわち、リターン号事件のような日英両国の現実的交渉の残影があり、また 17 世紀末に実際に訪日し、徳川綱吉との謁見も果たしたエンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』のような実録の英訳版も 1727 年に刊行される中にあって、しかし他方、イギリスにおける日本の記憶が次第に虚構化していく時期の日本表象は、とりわけその微妙で多様な姿をイギリス文学に映し出しているのではないか―。そこで、今回は、この時期にいずれもロンドンで刊行され、日本表象を豊かに含む三つの作品を取り上げ、その日本表象の性格を分析することで、日本表象がイギリス小説の勃興に与えた影響を考えてみたいと思います。三つの作品とはすなわち、ジョージ・サルマナザールの『フォルモサ』(1704)、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(第 2 部、1719)、ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』(1726)で。

まずはサルマナザールの『フォルモサ』から検討してみましょう。サルマナザールの生い立ちについては、いまだによく分かっていませんが、1679 年から 84 年頃、南仏のラングドックかプロヴァンスあたりに生まれたとされています。ドミニコ会やイエズス会などの学校で教育を受けて、早い時期から語学の才能を示し、7 歳か 8 歳の頃にはラテン語を習得していたようです。その後、英語を身につけ、アイルランドの巡礼者になりすましてローマへ旅しようとするものの、たちまち偽装が発覚。ここで一計を案じた彼は、日本人でキリスト

教に改宗したとの触れ込みで振る舞うようになります。ローマ行きの代わりにドイツ諸侯国を放浪した後、オランダに姿を見せたのが 1702 年頃。ここでスコットランド人聖職者アレグザンダー・イネスに出会い、「ジョージ・サルマナザール」として英国国教会に改宗しています。サルマナザールとは、旧約聖書の「列王記」（下、第 17 節）に登場するアッシリア王の名前のもじりでしょう。当時のヨーロッパにあって、日本よりもさらに情報の少ないフォルモサ（台湾）人になりすますことにしたのはこの頃のことで、イネス一行とともに 1703 年暮れ、ロンドンに到着。奇抜な振る舞いが功を奏し、彼は一躍、ロンドンの有名人となります。王立協会の公開質問の場に召喚されたり、オクスフォード大学で講演をしたりといった具合。『フォルモサ』は 1704 年の出版で、仏訳や独訳もただちに刊行されました。ただ、ペテン師人生もそう長くは続かず、早くも一七〇六年には、自ら経歴詐称を告白しています。結局彼は、後半生を、国教会の聖職者として、またグラブ・ストリートの三文文士として過ごすことになりますが、若きジョンソンとも親交を結んだことは有名で、ジョンソンは生涯、この年上の友人に対する敬意を忘れなかったと言われています。一七六三年に没した後、回想録が刊行されますが、結局、本名を明らかにすることはありませんでした。

このような人生を送ったサルマナザールが、いったいなぜ『フォルモサ』を著し、18 世紀初頭の数年とはいえ、実録としてこれをロンドンおよびその他の地域で広め、一世を風靡することになったのか。執筆動機などについても依然として謎に包まれていますが、今日は、この『フォルモサ』の描写に見られる重要な特徴を一つだけ指摘しておきたいと思います。それは、主に日本と中国を参照軸として登場させつつ、フォルモサの「騙り（＝偽りの語り）」をあたかも正当な「語り」として機能させる見事な手腕を発揮している、という点です。H-3、4 をご覧下さい。H-3 は、ロンドン主教ヘンリー・コンプトンに宛てた献辞からの引用ですが、ヨーロッパでも広く知られていた日本のキリシタン迫害に材を得、そこにイギリス国教会におけるイエズス会への反感を織り込み、自らは、日本のことではなく「日本に従属する島」である台湾のことを語る、という手法を取っています。日本への言及は、いわば、空想をリアリティに繋ぎとめる役割を果たしていたのではないか。身近な、比較的よく知られた事柄から出発して自らの空想を語る、あるいは、空想をあたかも現実であるかのごとく語りつつ、それが怪しくなってくると、途端に身近なリアリティを持ち出して煙に巻く、という手法は、例えば、H-4 の引用に見られるような、彼の人称の使い方にもうかがえます。ここでサルマナザールは、台湾の地理的説明をしようとしているわけですが、最初は「日本」や「中国」、「フォルモサ島」など、固有名詞を主語にして、疑う余地のない事実を示しつつ、やがて気候のことになると、実際にフォルモサへ行ったことのない作者は、we という 1 人称複数を使い始める。そして緯度のことになると、数学を習ったことのない私には分からないといって、I を持ち出す。この I に、「ヨーロッパの地理学者たちでさえ見解は一致していない」という強力なリアリティを結びつけ、そうすることで記述全体の信憑性を高める、というわけです。サルマナザールが詐称していたことを告白した後も、しばらくは各種の言語解説書などに引用されていたというフォルモサのアルファベットについても、彼は、巧みに

リアリティの間隙を通過させることで自らのフィクションをリアルに語っています。H-5 をご覧下さい。ここでサルマナザールが言わんとすることは、要するに、台湾の言語が、現在使われている日本語や中国語とは異なっているということだ。だが、そう言ってしまえば、化けの皮が剥がれやすい。ですから、日中の対立や、日本語とフォルモサの言語とが分離したという、ありそうな歴史的経緯を持ち出す。ほとんどの読者は、台湾どころか、中国にも日本にも出かけたことはありませんから、「そうかもしれない」と思わざるをえない。日本を持ち出すことで＜騙り＞を語りとして機能させる――日本表象は、こうした意味において、『フォルモサ』を支える重要な参照軸となっていたと考えられるのであります。

それでは、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』第 2 部の場合はどうでしょうか。

3. クルーソーはなぜ日本訪問を取りやめたのか？―デフォーのリアリズム戦略

1719 年 4 月に出版した『ロビンソン・クルーソー』(*The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe*)が広く江湖の読者に迎えられ、瞬く間に 4 版を数えるに至ったことに気を良くしたデフォーは、周知の通り、同年の内に『ロビンソン・クルーソーの更なる冒険の数々』を刊行する。[i]この第 2 部も、第 1 部と同様、クルーソーの 1 人称語りで進行するが、今回は、クルーソーの甥が登場して船を指揮し、そこにクルーソーとフライデー(Friday)が乗り込むという形で物語が始まる。かつてクルーソーが暮らした無人島を再訪した後、一行はブラジルへ向かうのだが、その途中でフライデーは戦死。その後も多くの困難に直面するがこれを克服しつつ、ブラジルからマダガスカル、カンボディア、台湾を経てようやく中国に上陸。今度は、陸路、中国からロシアを経てイギリスへ戻るという、10 年あまりの壮大な冒険と交易の記録である。クルーソーは台湾にも立ち寄るのだが、その記述はわずかに一段落のみ。デフォーが参照したと考えられる既存の旅行記等の全容はなお必ずしも明らかではないが、サルマナザールの『フォルモサ』については、ほとんど無視していたと考えてよいであろう。[ii]

だが日本表象は、クルーソーの中国上陸以降、この物語の展開に一定の役割を果たしていると見ることができる。というのも、クルーソーは、一時期、中国から日本へ渡ることを企てて船員たちに相談し、その結果、クルーソー自身は日本行きを断念するものの、途中で別れた甥が従僕として残して行ったクルーソーのお気に入りの青年が代わりに日本へ向うことになるからだ。この青年は、「およそ 8 年後には大金持ちになってイングランドへ帰国した」（172）とあり、[iii]「そのことは折をみて述べよう」（172）と記しているくらいだから、更なる物語の可能性さえあったとも言えよう。ではなぜ、クルーソー自身は、日本へ向かわなかったのか。

もちろん、幾つかの理由を考えることができる。中国上陸時のクルーソーの共同経営者が、「日本人は嘘つきで残酷で陰険な国民だ」（170-71）と反対し、その一方、件の青年がうまい具合に日本行きを申し出た、というわけだから、ストーリー展開はごく自然である。中国での顛末は、そもそも第 2 部のかなり後半になってからのことで、イギリスに帰

りたいという希望を強く持っていた主人公をさらに別の冒険に向かわせるほどの余裕がなかった、と言えるかもしれない。もっとも、作者が最初から日本のことを念頭に置いていたとすれば、第 2 部におけるクルーソーの行程は異なるものになっていたはずで、そうであるとすれば、デフォーは、まさにクルーソーに語らせているように、当初から日本紀行は別の機会に別の形で、と考えていたとみるのが妥当であろう。日本のことをまったく念頭に置いていなかったとするのは、例の青年とのやり取りに精彩のある描写がなされていることなどから見ても、いささか無理がある。

クルーソーの日本行き断念、というよりも、こうしたデフォーの日本描写断念の背景には、もう一つ、デフォーの想像力を満足させ、その創造力を十分に機能させるような、日本に関する実録が十分には彼の手元になかったためではないか、と考えることもできよう。実際、デフォーの生前の蔵書には、アルノルドゥス・モンタヌス(Arnoldus Montanus)の『東インド会社遣日使節紀行』（*Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy aen de Kaisaren van Japan*）を除くと、日本関係の文献はほとんどない。[iv]これに対して、例えば中国の場合、デフォーには、アダム・ブランドの『イヴァン、ピョートル両ロシア皇帝派遣使節団訪中記』（1698）のような参照すべき詳細な実録が、実は手元にあったのではないか推測されている。[v]ブランドは、北京到着の場面は次のように記している。

中国人の生活様式や習慣、宗教などについて読者に詳しく語るべきだと思うのだが、ここでは、中国帝国およびペキンと呼ばれている首都についての一般的な説明をするに留めておきたい。中国の強力な帝国について、外国人の間では、幾つかの名前で呼ばれている。（略）中国人自身は、これを多くの姓で呼んでいる。というのも、王位に就いた家系の多くが、その開祖によって特別な名称を付されているからである。（略）帝国の首都であって、王たちの宮殿がある北京市の名は、同名の地域名によるものだ。この東には、朝鮮半島と日本の間に広がる湾があり、北東には遼東地域、北にはタタールと万里の長城の一部、そして西には山西地域がある。（99-102）[vi]

ブランドの中国に関する記述は、「一般的な説明」と断っているにもかかわらず、歴史、地理、生活習慣、さまざまな観察に及んで詳細をきわめている。この種の実録に匹敵する日本関係の記録が手元になかったとすれば、当時のデフォーが日本のことを後回しにしたという事情もうなずける。

もっともデフォーの描写は、そうした実録の詳細さを常に裏切るものではある。彼は、こうした実録の価値を認めていないというようなそぶりさえをよく見せる。例えば、次のような具合に、である。

このように自分たちの航海や旅行についての記録を書いた旅行家は実に多い。だから、わ

れわれが行った場所やそこに住んでいた住民のことを長々と説明しても、あまり読者の関心をひくこともあるまい。(144)

クルーソーの北京到着時の記述もそうしたデフォーの姿勢をよく示すものと言えよう。北京と言いつつ、彼は北京のことをほとんど描かない。活写されているのは、北京ではなく、クルーソーの身の上である。

ついにわれわれは北京に着いた。私の世話をしてくれるのは、船長であった甥が召使として私につけてくれた青年一人にすぎなかった。この青年は信頼のおける勤勉な男であった。共同経営者も、親類にあたる召使一人を連れただけであった。ポルトガルの水先案内人はどうかというと、この人はしきりに宮廷を見たがったので、われわれはその旅費を払ってやった。つまり、費用を負担し、通訳として働いてもらうというわけだ。(177-78)

もちろんこの後、クルーソー一行は、宮廷見物などしてはいない。
　しかしながら、それでは、ブランドのような中国に関する詳細な実録など、デフォーにとってはまったく必要なかったか、と言えば、実際には決してそうではあるまい。詳細な実録の幾つかを熟読し、そこから自在に想像力を広げ、そこにしばしばフィクションを補って、自らのクルーソーを創作する――おそらくそれが、デフォーの作法なのであった。ハイデンライヒによるデフォーの蔵書目録が明らかにしているように、『ロビンソン・クルーソー』第 1 部、第 2 部には、その背後に、膨大な数にのぼる旅行記や実録による知識の蓄えがあったと見るべきであろう。
北京に到達するまで、クルーソー一行は実に「みじめな地方」を「25 日」も歩き続ける。その道すがら、彼は次のような心境を吐露している。

白状するが、実はここよりも、このあと旅した広大な韃靼地方の砂漠や荒野の方が私には面白かった。だがここの道路は、よく舗装され手入れも行き届いていて、旅行者にはたいへん都合がよかった。もっとも、このあたりの人々は、貧乏で無知なくせに、横柄で尊大で無礼であり、まことに違和感を覚えざるをえなかった。(176)

このような記述を挿入するためには、おそらく、実録を読み込み、自らの読後感をよく整理しておく必要があったであろう。その読後感こそ、クルーソーの旅にリアリティをもたらす中心的要素となっていたのではあるまいか。クルーソーを日本に旅立たせるためには、虚実綯い交ぜのそうした読後感が、未だ十分にデフォーの中に醸成されていなかった、と考えられるのである。

4. ガリヴァーと日本――スウィフトはなぜ日本を描いたのか？

日本を目前にしてこれを通過したクルーソーに対して、『ガリヴァー旅行記』の主人公は、ラグナグ国王の親書を携えて日本にやって来る。一七〇九年五月下旬のことだ。[vii]「エド」(201)で皇帝に拝謁した後、「長くて辛い旅」(203)を経て「ナンガサク」(203)に到着したのが六月九日とある。その後まもなく、ちょうどアムステルダム(Amsterdam)から「ナンガサク」に来ていたアンボイナ号に乗って日本を去ってしまうわけだから、日本滞在はどう見ても、せいぜいひと月程度、日本訪問を扱った第 3 篇第 11 章は作品中、最も短い。とはいえ、クルーソーを日本に渡ることなくイギリスへ帰国させたデフォーと、現実に日本を訪れるガリヴァーを描いたスウィフトとでは、その日本表象の持つ意味にかなりの違いがあったことは間違いない。実際、『ガリヴァー旅行記』には、主人公の日本訪問とは別に、さまざまな場面で日本への言及が見られる。第 1 篇の最後で小人国からイギリスへ戻ろうとするガリヴァーを救出したイギリス船は、「日本から戻る途中」(70)であったし、第 2 篇で大人国ブロブディンナグの位置を説明しようとする彼は、「日本とカリフォルニアの間にはただ海しかない」(100)と考えているヨーロッパの地理学者を批判する。第 3 篇でガリヴァーが空飛ぶ島ラピュータにたどり着くのは、海賊船の船長の好意で彼が命拾いをしたからなのだが、この船長は日本人であった。『ロビンソン・クルーソー』とは対照的に、『ガリヴァー旅行記』には日本表象が遍在するとさえ言えよう。リリパットやブレフスキュといった小人国、大人国ブロブディンナグ、ラピュータをはじめとする太平洋の島々、馬とヤフーの社会フウイヌムといった、奇想天外なガリヴァーの訪問先にあって、日本は唯一、実在であることが読者一般に了解された島でもある。スウィフトはなぜ日本を描いたのか。

まず、最初に確認しておくべきことは、スウィフトが、日本の文物の詳細にことさら強い関心を持ち、それがこの『ガリヴァー旅行記』や、『ガリヴァー旅行記』の 2 年後の 1728 年に執筆したとされる「日本の宮廷および皇帝について」(“An Account of the Court and Emperor of Japan”)などでの日本表象につながっているというわけではない、ということだ。『ガリヴァー旅行記』における日本表象は、たしかに、スウィフトの意識の中に日本があったことを意味するものではある。だが、先に述べた通り、第 3 篇第 11 章におけるその具体的な描写は著しく短い。「日本の宮廷および皇帝について」に至っては、当時のイギリスのウォルポール(Robert Walpole)による政治を諷刺するための舞台でしかない。それは、『ガリヴァー旅行記』に登場する小人国リリパットなどと同様、虚構に満ちたものである。また、スウィフトの著作の全体を見渡しても、彼が、日本の地理や歴史、社会などを詳しく書こうとした形跡は見あたらない。彼は『慎ましき提案』(*A Modest Proposal for Preventing the Children of Poor People from Being Burthen to Their Parents of the Country*)の中でサルマナザールに言及しているが、サルマナザールがフィクションとして台湾を描出して見せたような表現手法を取ることもなければ、むろん、デフォーの中国のような描写もしない。『ガリヴァー旅行記』における日本表象は、この作品の構成にうっすらとした補助線を与えている、といった様相を呈しているのである。そ

れではなぜ、この補助線が必要だったのか。

『ガリヴァー旅行記』の作品構成とその日本表象をめぐっては、注目すべき先行研究が少なくとも二つある。一つはウィリアム・エディ(William A. Eddy)による素材研究だ。彼は、平賀源内の『風流志道軒伝』や遊谷子の『和荘兵衛』、曲亭馬琴の『夢想兵衛』など、18 世紀後半から 19 世紀にかけて日本で出版された『ガリヴァー旅行記』的物語、すなわち主人公の奇想天外な旅と冒険を諷刺的に描いた作品群に注目し、それらが、オランダ語訳『ガリヴァー旅行記』からの影響ではなく、実は、そうした日本の『ガリヴァー旅行記』的作品群の祖型と言うべきものが日本もしくは中国にあり、それが 17 世紀後半から 18 世紀初頭にかけて、おそらくはオランダ経由でヨーロッパに伝わって、スウィフトの目に留まったのではないか、と推測をしている。[viii]実際ガリヴァーは、日本訪問の直前に訪れたストラルドブラグ（不死人間）の社会について次のように述べており、「日本の誰か」についてスウィフトが多少なりとも意識していたことがうかがえる。

日本の誰かがこのストラルドブラグの話を書いていることは大いにありうるが、なにしろ私の日本滞在は短かったし、その言葉がまったく解せないときているのだから、調べると言っても調べようがなかったのである。(201)

さらに、世界地図の中に小人国や大人国を想起させるような島々が描かれた『坤輿万国全図』のような地図類が、17 世紀後半から 18 世紀にかけて、日本もしくは中国からヨーロッパに伝わり、これをスウィフトが目にしていた可能性も十分に考えられよう。こうしたことを勘案するならば、エディの推測を完全に斥けることはなかなか難しく、そしてもしこの推測に従うならば、日本は、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』の構想に影響した重要な素材の一つであったということになるのである。もっとも、エディの推測する祖型が具体的に何であるのかは、今のところ分からない。寺島良安の『和漢三才図絵』（1712）のような作品を想定することもできないわけではないが、そのオランダ語訳などがスウィフトの書架に存在したという記録もない。

もう一つの重要な先行研究は、ロバート・マークリー等による日欧交流史的視点から、『ガリヴァー旅行記』における日本表象を捉えようとしたものである。スウィフトはなぜ日本について多くを語らなかったのか、その理由をマークリーは次のように指摘する。

ガリヴァーが日本人といろいろ議論するとなると、三つの危険性があった。つまり、ウィリアム・アダムズ(William Adams)のように日本社会に同化してしまう危険性、イエズス会士のように殉教したりクリストヴァン・フェレイラ(Cristóvão Ferreira)のように棄教を迫られたりする危険性、そしてオランダ人のように日本人に従属してしまう危険性、である。だからガリヴァーは、ブロブディンナグの国王やフウイヌムの主人との間に見られるような本格的な会話を、日本の皇帝とはできなかったのである。ガリヴァーにできたの

は、嘘を言い、知らぬふりをして卑しき冒涜的行為を免れることだけであり、そういう冒涜的行為を、スウィフトは、オランダ人の国民性の「本質的な」部分とほのめかすのである。(255)[ix]

つまり、ガリヴァーにとって日本人は、「大人国の住人や話をする馬以上の脅威」(265)であったというのである。『ガリヴァー旅行記』はもちろんのこと、当時のヨーロッパにおける日本表象が有した重要な、そしてかなり深刻な意味を指摘したものと言えよう。ただ、スウィフトが、例えばアダムズの足跡に関して、マークリーの指摘するような「同化してしまう危険性」を実際にどこまで強く意識していたか、というといささか疑問が残る。「日本の宮廷および皇帝について」の舞台に、わざわざそのような危険性をはらむ日本を選択するという彼の判断についても、マークリーの視点から説明するのは難しい。

作品の全体像から判断してむしろ妥当だと思われるのは、日本表象が、『ガリヴァー旅行記』においては、虚実の結節点として機能していたのではないかという解釈である。言うまでもなくこの『ガリヴァー旅行記』は、小人国や大人国、馬の社会に、諷刺すべき現実の人間社会を精密に映し出した作品である。夏目漱石が述べているように、それは、

到底実世界にあり得べからざる事実を、あたかも厳として存在するが如く明瞭に感ぜしむる想像である。（中略）コールリッヂが現在の事を書いて夢幻世界にある如き感を起こさしむる如く、スウィフトは荒唐架空の世界を描いてあたかも現実界にある如き思いを起こさしめる。（中略）出立点は頗る奇怪な想像であるが、一度び出立さえすれば、余は極めて写実的な想像で進行するのである。[x]

といった性格のものだ。ガリヴァーの旅に、イギリス帰国という帰結点を設けようとすれば、いな、「荒唐架空の世界」を「現実界」のように描き出しつつ、読者が、そして作者であるスウィフト自身が、実際に直面する「現実界」に作品世界から立ち戻るためには、そこに、両者を結びつける結節点が必要になる。そうでなければ、「荒唐架空の世界」を自然な形で収束させることはできないからだ。虚実綯い交ぜの日本表象は、この結節点として機能していたのではないだろうか。

当初スウィフトは、第 4 篇の後に第 3 篇を執筆したとされる。そうであるとすれば、現在の第 3 篇に描かれた太平洋の島々は、フウイヌムの後に訪れたということになる。この島々もまた、いずれも「荒唐架空」ではあるが、リリパットやブロブディンナグのような透徹したデフォルメの構造はなく、動物が社会を支配するということもない。登場する人間たちは、不思議な格好をしてはいるものの、サイズは普通である。そういう第 3 篇の最後に置かれた日本は、それゆえ、読者にとって、そして何より作者スウィフト自身にとって、「荒唐架空の世界」と「現実界」を結ぶ適切妥当な結節点としての役割を担っていたのではないだろうか。むろんその描写が詳細である必要は全くない。「荒唐架空の世界」

と「現実界」の際立ったコントラストを曖昧にしてしまうからである。

5. 近代小説誕生をめぐる日本関係秘史

あり得るかもしれない、あるいはあり得たかもしれない可能性を描くということは、フィクションと呼ばれる表現領域の重要な特質である。いわゆる想定外の事象も含め、そういう可能性の確度できるだけ高めるには、当然のことながら、現実世界への鋭利な観察と、可能性を読者に対して十分に説得できる文章が必要になる。イギリス近代小説は、そのような要請を満たす形で、その相貌を明らかにし始めた、と言うこともできよう。そういう 18 世紀初頭の文学的状況にあって、「遠く離れた国々への旅」という作品の舞台設定は、きわめて効果的であった。たとえ遠く離れていても、そこは天上界でもなければ地獄でもない。言葉も人種も生活習慣も相当程度異なるものの、そこにはともかく人間がいて、それなりの社会的まとまりを持って人生を送っている。喜怒哀楽の情もある、そういう確からしさがひとたび担保されれば、奇想天外とさえ思われるようなさまざまな可能性を描くことは、逆に、身近な生活世界を描く以上に、容易になる。遠く離れていることによって、作者も読者も、身近な生活世界が有するリアリティの呪縛から、いささかなりとも解放されるからだ。「遠く離れた国々」は、近代小説を生み出す強力な磁場であったとも言えるだろう。

島田孝右氏の調査によれば、18 世紀最初の 10 年間だけでも、ロンドンで刊行された英語の書物に日本が登場する例は 200 件を越えるという。[xi]既に述べたように、当時のイギリスの文人にとって日本は、遠く離れた極東の島ではあるものの、決して想像上の島ではなかった。かつては外交関係もあり、貿易もおこなわれていた。オランダ経由であれば、当時にあってもなお交易が途絶えていたわけではない。しかし他方で、日本の鎖国政策と島国という地理的事情は、少なくともイギリスから見ると、人とモノの交流を著しく狭め、日本に関する知識を現実から乖離したものとするのに十分であった。日本表象が、単なる地理的記述にとどまることなく、フィクションを生み出す重要な磁場となった理由はここにある。

もちろん本稿で取り上げたサルマナザール、デフォー、スウィフトは、それぞれが著しく異なる文人としての個性を有しており、その日本表象の性格も大きく異なっている。サルマナザールは、かつて自らのアイデンティティを日本人であるとし、その嘘が見抜かれやすいと感じると、より見抜かれにくいと思われる台湾人であると称した。だが、その台湾のことを語るべく、常に日本を引き合いに出すことになる。それは、あり得るかもしれない可能性の確度を高めるための戦略であったと言えよう。これに対してデフォーは、日本を描かなかった。『ロビンソン・クルーソー』第 1 部で、無人島での一人暮らしという可能性を描き切ったデフォーは、しかし、実録を入念に読み込み、作品の舞台に関する十分な想像力を喚起した上で、そこに自らの創造を加えて行く作家であった。それだけの十分な日本に関する情報が、彼の手元にはなかったのである。手元にある情報という点で

は、スウィフトもそれほど事情は変わらなかったであろう。だが、彼の作品創造において、そういう詳細な実録の情報は不要であった。彼に必要だったのは、遠く離れた小人国や大人国、馬の社会といった舞台を、適切妥当な形でイギリスやアイルランドの日常生活と結ぶ結節点であり、日本表象はまさにその意味において効果的に機能したと見ることができよう。

18 世紀後半以降の小説には、イギリス国内を舞台とするものの数が圧倒的に増えてくる。小説が主題とするものの質的変容、市民社会の前景化、読者層の変化といった経緯が、その原因と考えられよう。冒頭に触れたように、そうした中で日本は、次第に、比喩表現の片隅に追いやられていく。だが、そういう近代小説の系譜の発端に、虚実綯い交ぜの日本表象があり、それがフィクションの構築に一定の役割を果たしていたことを見逃すべきではあるまい。近代小説という表現領域の特質を考える上でも、また広く、人間の想像力の広がりと作品創造のダイナミズムを考える上においても、である。

---

[i] 本稿では、『ロビンソン・クルーソー』を第 1 部、『ロビンソン・クルーソーの更なる冒険の数々』を第 2 部と呼ぶ。

[ii] ハイデンライヒの蔵書目録にも『フォルモサ』は含まれていない。

[iii] 第 2 部からの引用はすべてピカリング・アンド・チャットー版（*The Novels of Daniel Defoe* の第 2 巻）から、拙訳による。本文中の引用末尾に該当頁数を記した。なお、平井正穂訳を参考にさせていただいた。

[iv] Heidenreich 14 を参照。モンタヌスの『東インド会社遣日使節紀行』の初版は 1669 年にオランダで刊行され、翌年には英訳や仏訳が刊行された。もっとも、モンタヌス自身は日本を訪れてはいない。ハイデンライヒが日本関係のデフォー蔵書として言及しているのは、この一点のみである。ちなみに、ハイデンライヒがデフォー蔵書として挙げている中国関係の文献は 7 点、ロシア関係は 4 点で、これはクルーソーが巡る他の地域に比べれば少ない方だが、それでも日本についてよりは多い。

[v] ブランドについては Bridges 231 を参照。ただし、ハイデンライヒのデフォー蔵書目録にブランドはない。

[vi] ブランドからの引用は 1698 年版によるもので、拙訳による。引用末尾に当該頁数を記した。

[vii] 『ガリヴァー旅行記』からの引用は、すべてオクスフォード・ワールズ・クラシクス版からのもので、拙訳による。該当頁数を引用末尾に記した。なお、富山太佳夫訳を参照させていただいた。

[viii] Eddy 68-71 を参照。なお、この問題については、『「ガリヴァー旅行記」徹底注釈』（注釈篇）pp. 391-97 のほか、次の拙論を参照されたい。『風刺文学の白眉』105-16、「『ガリヴァー旅行記』をめぐる東西文献交渉史」202-06。

[ix] マークリーからの引用は拙訳による。該当頁数を引用末尾に示した。
[x] 引用は、夏目漱石『文学評論』（下）121 による。
[xi] 島田 29-43 を参照。

＊本稿は、科研費助成事業「近代英文学における日本の表象に関する実証的研究」（基盤研究(C)、課題番号 26370296）における研究成果の一部に基づくものである。